

古典の日

二

深川



松尾芭蕉

弥生も末の七日、明ぼの、空朧として、
月八有あけにてひかりおさまれる物から、富士の峯幽に見えて、上野・谷中の花の梢、又いつかはと心ぼそし。むつまじきかぎりは青よりつどひて、舟に乗りて送る。千じゆと云所にて船をあがれば、前途千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそぐ。

行春や

鳥啼魚の目ハ泪

是を矢立の初として、行道猶すゝまず。人々は途中に立ならびて、後かげのミゆるまでハと見送るなるべし。



隅田川のほとりにある芭蕉像 (東京都江東区)

新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉集②『紀行・日記・俳文・連句編』(小学館刊)から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

旅と紀行のスタイル

これまたまことに美しい一節。言葉の配列にひそかに五・七・七・五のリズムを忍ばせて、その波打つ流れが、晩春の江戸の夜明けの景を彷彿として浮かび上らせる。

元禄二年(三月)の二十七日(陽暦では一六八九年五月十六日)早晩、有明けの月が光失せてかかるのを眺めやりながら、深川から小舟で隅田川をさかのぼってゆくのが、旅姿の詩人芭蕉とその門人、河合曾良である。ゆるる水の上から、遠く夜明けの富士の頂きだけは望まれたかもしれない。だが、「上野、谷中の花の梢」は、この春に見た桜の花の残像にすぎなかったらう。それがいつそ旅立ちの心細さをうながす。

(こまでは源氏物語(帯木)や西行の歌にも借景しながら、「朧々」以外すべてやまと言葉で綴ってきた。それが、千住での別荘の場となると転調して、「前途千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそぐ」と、唐詩以来の慣用句も使ってにわか悲壯調に昂揚する。そして一泊、二泊の間において、「行春や鳥啼」の一句による画龍点睛。

いかにもみごとな修辭の術だ。まさに「カッコいい」だ。ここで元禄の俳聖を少しばかりひやかしておけば、「前途千里」とはいくらなんでも得の切りすぎではないか。蕉翁が太平の列島でどうぞをいっていたころ、たゞは博物学者ケンペル(一六五〇—一七二六)は、一六八〇年にドイツの故郷を出立して以来なんと十年、スウェーデン、ロシア、ペルシャ、インド、パタゴニアとまさに何万里もの苦行の旅をつづけ、行く先々でその地の文明と自然を究明に研究し、ついに世界の奥の細道、日本へと渡航しようとしていた。やがて芭蕉の旅ともどこかでずれ違いつつ二年(一六九〇—九二)の日本滞在の後、あの浩瀚な元禄日本文明論History of Japanをあらわす。同じ「そぞろ神」にとりつれた同時代の旅人であっても、学者ケンペルと日本詩人芭蕉とは、旅のスタイルもスタイルもその記述の意図も、まるで違っていた。そんなこともここでちょっと思い出しておかねばならない。

おくのほそ道

芳賀徹さんとたずねる

現在に通じる豊かな文化

学生時代から今日まで、古典といわれるものを何冊読んだでしょうか。

古典と私

実は、物語として読んで来たものすべてが、私の仕事の中に豊かなひろがりをもたせてくれました。

服飾評論家 市田ひろみさん



昨年私は、北海道洞爺湖における、G8サミットの同伴者プログラム

で、一時間で、日本の文化を紹介してほしいという依頼を受けました。

七月七日当日。書道の実演から幕が開き、果谷の和紙のパネルに、自作の詩をかな文字で書きま

した。そのパネルを背に、源氏物語を語りながら、女房装束の着装を紹介していったのです。

平安時代の絵巻に描かれている宮廷の礼服は、そのまま今の宮中の礼服です。

古典文学・文化を広めようと、古典の日推進委員会は11月1日を「古典の日」と定めた。



猫と縁のある檀王法林寺 (京都市左京区)

ということでしょうか。京都三条大橋東詰、京阪三条駅北側の三条通りに面して「浄土宗だん王」と刻まれた石柱の立つ山門があります。この檀王法林寺では、寺社からの創出では最古という黒い招き猫の複製が有償で授与されます。毎年2月の涅槃会に公開の「八相涅槃図(江戸時代作)」には、1匹の緑眼のトラ猫の姿もあります。川端通り側の赤門は京都市指定の重要文化財。街の喧噪にまぎれてたずむ、猫好きが訪れたい古寺のひとつです。(NPO法人・都草 河本俊子)

平安貴族の屋敷 優美な猫の姿

文学ウォーク

猫は奈良時代の仏教伝来の折に、鼠の害から經典を守るため渡来したといわれます。貴重な輸入猫は平安貴族の屋敷の中で首綱をつけて飼われていたようです。『枕草子』には「簾の外、勾欄に、」赤き首綱に白き札つき」と優美な描写があります。また『源氏物語・若菜下』で、女三ノ宮の姿があらわになり柏木が恋慕の情を募らせたのは、走り出た2匹の猫の首綱が御簾をめくり上げたためでした。近頃の猫は、首綱をつけなくても室内で家族同様に大切にされ、鼠など一度も見ずに生涯を終えることもあるでしょう。猫かわいがりするだけの私たちのこの暮らしが、平安貴族なみに豊かである

忘れたくない一日を、忘れられない一日に。

紫

めでたき色

受け継がれる日本の色

優 雅な気品や、あでやかな情感を兼ね備えた「紫」。古くから人々の憧れだった紫は、平安時代も美意識のシンボルとされ、宮廷の人々にもはややされました。例えば「源氏物語」は「紫の物語」とも言われ、女主人公たちは「桐壺」「藤壺」「紫の上」紫を連想させる名前を付けられています。また、紫で染められた衣服は、他の衣服と重ねておくと色味が移ります。紫が「ゆかりの色」とも呼ばれるのは、愛しい人を自分の色に染めたいという想いからきています。

同じ色でも少しずつ色調が異なり、藤色、杜若色、紫苑色、桔梗色とさまざまな名前でも多様な世界を見せてくれる「紫」。平安貴族はこれら紫系の色を「めでたき」色として好んで用いていたのです。



WATABE WEDDING GROUP

ブライダルも、アニバーサリーも。すてきな生活創造企業 ワタベウェディンググループ

